
俺達、幕末新選組！

なかむら 奏多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達、幕末新選組！

【Nコード】

N2304B

【作者名】

なかむら 奏多

【あらすじ】

『俺、野口健司。二十歳。どういうわけか、平成と文久に生きる俺達二人、魂が入れ替わった。』動乱の中を交差してゆく若者達の友情と苦悩を二つ時代を背景に描きます。

「1」ありえねえ！

「おい！健司、起きろ！」

誰かが俺を呼ぶ。

- - 誰！

そう思った瞬間、頭の中で耳を突き抜けるような高い金属音が鳴った。

- - ああつ。

思わず耳を塞ぎ、俺は苦痛に身体を丸めた。

「いい加減に起きないと、先生に叱責されるぞ。」

せわしなげに男の声が俺の耳元で囁く。やめろよ。俺の耳に息を吹きかけるのは。くすぐったくて身が抖れる。

- - 冗談つしよ。

ところで、ねえ、センセイって誰よ。シッセキって何だ？訳わかんねえって、あんた誰！

片目で起きた。俺はぎよつとした。そしてもう一度強く目を閉じ、今度は両目を開けた。

- - えっ・・・？

空白が俺の意識を支配し、思考が止まった。脳幹が痺れているようだ。唾然とする？茫然とする？どちらでもない。今、俺の目の前に広がる光景を情報として脳神経が処理するのを拒んでいる。

「起きろ！置いて行くぞ！」

はつきりした力強い声が高い位置から降って来た。

同時に思いつき尻を蹴飛ばされ、息が止まりそうになる。

何をどう受け入れるっていうんだ。これは現実なのか。俺はやったことで起き上がりそのまま座り込んでしまった。

まるで時代劇だ。何かの撮影か？それならいつの間にこんな所へ連れて来られたんだ。

— なんかのドッキリ？な分けないよな。

「ねっ、これなんすか？俺なんでここにいるんすか？で、あんた誰。」

人の良さそうなオッサンが俺の質問を無視して、そのはしからあれやこれやと指図する。それから何度も、大丈夫かと問う。さっき俺の耳元で囁いたのと同じ声だ。

先をケバケバに潰した割り箸と塩を渡され歯を磨く。ほつれた前髪を撫で付け、袴を着ける。高校まで部活で剣道をやってたのが役に立った。でも手甲脚半がうまく着けられない。オロオロしてたら、オッサンが手伝ってくれた。

「どっか具合でも悪いのか、健司。」

しかしなんでこのオッサンは、俺の名前知を知っているんだ。俺はオッサンの顔をまじまじと見つめる。

が知らない顔だ。窪んだ眼が親切そうに俺を見ている。

「すいませんが、ここは何処ですか。」

状況が飲み込めないので、思わず敬語が口からこぼれでる。

「小石川の伝通院だ。」

草鞋が履けない。オッサンの履くのを見よう見まねで履く。親切そうなオッサンの顔色が心なしに変化したように見えた。

そうしているうちに、俺は少し冷静になった。それが悪かった。背筋に悪寒が走った。冷や汗をかくというのはこういう事をいうのか。指の先まで痺れて、俺はこの時初めて茫然とした。

「- もしかして、今は江戸時代？」

オッサンが俺を憐れんでいるようだ。

「すいません。聞くんですが、今って何年すか。テンボウ？アンセイ？」

「- お願いだ。ヘイセイと言ってくれ。」

声が掠れる。オッサンは答えない。

「とにかく健司、ここでじっとしている。すぐ戻って来る。」

「- おい、オッサン。独りにしないでくれ。」

追いかけようとして右肩を誰かに掴まれた。

振り向くと海賊みたいに黒い眼帯をした男が立っている。

「なんだ。健司。どうかしたのか。」

「あの……。あんた誰。」

「おいおい、どうなっているんだ。かんべんしろや。皆、集まっているから、お前も早くこいや。」

眼帯の男が俺の腕を引っ張る。

「オッサンにここ動くなって言われてるから。」

「オッサンって……。」

眼帯の男の表情が険しくなる。

「あつ、オッサン。」

「オッサンって平間君のことか。健司、どういう見だ。平間君をオッサン呼ばわりするとは。」

「おい、先生を連れて来たぞ。平山さん。健司の様子が少しおかしいんでな。」

平間と呼ばれるオッサンが声高に言う。

見るとオッサンの後ろを身長のでっかい偉そうな男が眉間に皺を寄せてどこかと歩いて来る。

――すげえ。

迫力に驚いて、俺は二三歩後退る。

「さつきは尻を蹴飛ばして悪かったな、健司。具合が悪いのなら早く言わんか。」

―クッ。こいつか。俺の尻を蹴飛ばしたのは。まだ尾底骨の辺りが痛いじゃねえかよ。

そのセンチと呼ばれる男が、俺の額に手を当てた。大きいがひやりと冷たい掌だ。

「熱があるわけじゃなさそうだな。腹は下ってないか。」

俺は首を振った。

「俺が誰か判るか。」

俺は首をかしげる。判らないから仕方が無い。江戸時代に知り合いなんかいない。

センセイはそのいかつい指で俺の顎を持ち上げた。

「俺が解らんというのか。では、自分の名前は。」

「野口健司。」

「歳は。」

「十九、いや数えて二十歳。」

数え歳というのがあるのを何故か聞いて知っていた。

「生まれた所は。」

「東京。」

そう言つて、しまったと思う。

「トウキョウ？何を言ってるんだ、健司。俺達はこれから京へ上るんだぞ。それは解っているか。」

—そんな。聞いてないぞ。俺はまた首を振った。センセイが大きな溜息をついた。

「仕方無い。重助、すまんが健司を水戸へ送り届けてくれんか。」
—ちよつと待った。

俺、東京生まれ。江戸時代の水戸へ返されても困る。

「京へ行きます。足手まといにならないようにしますから。連れてって下さい。」

俺はセンセイの顔を必死で見据えた。真剣なこの眼を見てくれ！見捨てないでくれよ。センセイ。オッサン。

そして、自分の言つたことの重大さにおののいた。

東京から京都まで歩いて行くんだぜ。

- - オーマイガッア！

やるっきゃないのか、俺。

朝起きて、いきなりオリンピック会場に引っ張り出され、フルマラソンを今から走れと言われてるようなもんだ。違うか？事態はもっと深刻なはずに決まっている。

見渡せば、ざつと二百人は居るだろう。侍、侍、時々変な奴も混じっている。

時代劇なんかじゃないんだぜ。本物だぜ。それに俺だってこの髪、

鬘じゃない。刀も本物だ。腰がひつぱられるように重い。

二本も差せば結構腰にくる。背中には荷物。懐にもなんだかだと細かい物が入っている。慣れない着物は窮屈だ。

俺のセンセイは、オッサンや眼帯男から芹沢先生と呼ばれている。

どうやら俺、健司もその取り巻きの一人らしい。

点呼が始まる。眼帯野郎は、平山五郎。オッサンは、平間重助。覚えてたぞ。

「土方歳三君。沖田総司君。山南恵助君。永倉新八君。藤堂平・・」
ちよっと待った。これって何。もしかして新選組！俺、タイムスリップしちゃったわけ？いや違う。野口健司。名前と外見が同じで全く違う奴と、中身が入れ代わってしまっている。

物理的にどう考えればいいんだ。じゃあ平成に居る俺はどうなっている。いや、そんなことは今はどうでもいい。落ち着け。なんとか切り抜けなければ。先のことを考えるのはよそう。

確かテレビで新選組の時代劇やってたのをおふくろが必死で見てたっけ。話の流れを思い出せ。あの俳優なんてったっけ。土方歳三やってたの。今はそんなこと関係ない。本物がここに居るんだし。

すらりと背の高いすつきりとしたイケメンだ。かっこいい。このなかでも飛び抜けている。

「で、三番隊小頭を務める芹沢です。よろしくお願い致します。」

センセイが頭を下げた。

「それでは出立致します。」

芹沢センセイの声が響き渡る。朝の冷たい空気が震え、隊列がざわりと動き始めた。俺も歩き始めた。とりあえず、後戻りはできない。京へ向けて。一塵の風が落ち葉を舞い上げて強く吹いた。男達の歩調に合わせて土埃が立つ。

俺の何かが始まる。確かな物は何ひとつない始まりだ。

頼るものはない。覚悟？そんなものが俺の心にあるというのか。

あるならば、引きずり出して来よう。

いつもなら困難は笑ってごまかしやりすごす。でもひきつった頬で

は笑えない。

今更ながら、身体の芯が震えて来る。

神や仏があるというなら教えてくれ！俺は何のためにここに居るんだ。いったどういう必然なんだ。

- - おやじ。おふくろ。

俺はここにいます。

文久三年。幕末だ。笑っちゃうぜ、全く。眼の前が涙で霞んで来る。

- - 泣くな！健司！歩け！京都まで。

答えは多分そこにある。

【2】もうひとりの健司

今日は待ちわびていた出立の日だというのに、俺はいたいここで何をやっている。

狐にでもつままれているのか、さっぱり見当がつかない……。ここにもうひとりの健司が、混乱した頭の中をますます掻き乱してベッドの上に座っていた。

何をどう考えても答えらしきものに行き当たらない。時間ばかりが過ぎてゆく。

時計が同じ律動で無機質な音を刻んでいる。どうにも耳触りで健司の焦燥感を煽り立てる。

健司は目覚まし時計を掴み上げると力任せに投げ付けた。電池がこぼれ落ち、音が止まった。

一瞬静けさが辺りを覆い尽す。不安が増大する。

「ケン！何やってんの。いい加減にしなさいよ。」

女の甲高い声が家中に響いた。

その声に健司ははっとした。こうしていても仕方が無い。健司は意を決し、おそろおそろ部屋のドアを開け階下へ降りて行く。

ドアひとつ開けるにもひと苦労だ。押すのか引くのかさえ解らない。階下は光に溢れていた。なにか芳しい、良い香りが立ち上ってくる。――腹へったな。

香りにつられて健司の腹がギョルギョルと鳴った。

すべて西洋風にしつらえられた部屋の調度は、あくまでも軽薄で落ち着かない。

「あんた。今日学校は？」

「えっ。」

「講義無いの？またサボってるんじゃないでしょうね。パン焼く？」

「あっ、あの・・・」

「なんかあった？またふられた？」

つていうより、あんたの場合はそれ以前の問題だけだね。」

よく喋る女だ。口を挟む隙間など健司に与えない。

「さつきはどしたの？ん？突っ立ってないで座んな。おかしいよ、あんた。」

女は喋りながらパンにマーガリンを無造作に塗った。

健司は、促されるまま椅子に座る。

「コーヒーいれる？」

女がまた立ち上がった。

「あの、聞きたいことがあるのですが。」

「何なの、改まって。」

健司の前にコーヒーの注がれたマグカップが置かれた。

「俺は誰ですか。あなたは誰ですか。ここは何処ですか。」

女はしばらく健司の顔を見つめていた。健司の顔が真顔なのでむしろ女は腹を立てた。そしておもむろに言った。

「冗談言うのは止めなさいよ。親を馬鹿にして。いくらあんたでもそんな冗談許さないわよ。」

――親？この女何を言っているんだ。母親は随分前に死んだ。

しばらく女と睨み合っていたが、健司はいきなり流しに走り、置きっ放しになっていた包丁を握り締めた。さつき目の端に確認しておいたのだ。

「大切な役目をおおせつかり、いざ京へ向けて出立という今日。それも叶わず、何もできず、ここにただ有るのは不本意であります。ならば潔く自刀して果てましょうぞ。」

叫ぶ健司に女は慌てた。

「待って！落ち着いて！話を聞くから。」

健司の頭の中に仲間の顔が咄嗟に浮かんた。芹沢先生や平山先生に申し訳が立たない。

いつそ死んでしまえば、ここから逃れられる。いや戻れるかもしれない。もと居た場所へ。

「おふくろ、兄貴、何やってんの！」

寝ぼけ眼で二階から降りて来た弟の真司が慌てて止めに入った。

―我が家の一大事、勃発！兄貴が血迷った！

真司がすかさず健司の顔に飛び蹴りを入れ、ひるんだ所を取り押さえた。

「死なせてくれ。このまま生きていても仕方無いんだ。」

包丁を取り上げられ、健司はへたりこんだ。そして悲痛な声を上げた。

そうはいっても、健司の話は簡単に納得できるものじゃない。

三人は茫然としてソファ―に座っていた。なんだかんだともう夕方に近い。部屋の中には沈みかけた陽の、淡い金色の光が差し込んでいる。

健司はどこから探し出して来たのか、剣道の稽古着を着てソファ―に正座して座っている。真司の蹴りが入った左の頬が赤黒く腫れていた。母親の早紀は健司の右側でポテトチップをつまんでいる。弟の真司は健司の左側で、欠伸を何度噛み殺した。

―正直、つまんね。

早紀が好きで揃えた新選組のDVDを一話から順に見ているのだ。

「いいのかよ。こんなん見せて。みんな死んじゃうんだぜ。」

「かまいません。真実を知りたいのです。」

健司がそう言つてきかない。

「真実つて言つても、半分はお芝居だからね。」

「しかし、流れは実際に則して居るのでしょうか？」

「そうだけど・・・。」

早紀が健司の相手をしていて口ごもった。

いよいよ芹沢鴨の登場だ。

「あつ、あつ、こんなんじゃないですよ。先生はもっと大きくて威厳のある方だ。」

「だからお芝居だって。」

健司が乗り出してテレビに飛び付きそうになるのを二人でやっと止

める。買ったばかりの薄型テレビを壊されてはかなわない。

芹沢鴨の謀殺シーンは健司にとってクライマックスだ。

健司の膝に置いた拳が小刻みに震えている。

「確かに先生は、突拍子もない事をされるが、何も先生が特別と言う訳では無い。そんな奴は掃いて捨てるほど居た。どうして先生が悪者にならなければならん。何故先生が奴らに殺されなければならん。」

誰に言うとも無く言葉がこぼれ出て来る。そして悔しさに噛み締める唇から血が滲んだ。

「止めなよ。血が出てるし。」

真司がティッシュを箱ごと渡した。

「申し訳ない。」

健司はそのティッシュで唇を拭いた。

薄いしなやかな紙が唇に絡まり張り付く。それを指でなぞりながら、

「死んでしまうんですか。みんな。」

「だから見るのやめなって言っただじゃない。」

「大丈夫です。そういう時代ですから、やむを得ません。」

健司は言った。

「でも、あんただって死んじゃうんだぜ。切腹だぜ。首が飛ぶんだぜ。」

「みんな覚悟のうえですよ。死ぬことを恐れていたのでは、何も出来ません。」

「そういうもんかなあ。いまいちわかんねえな。そういうの。俺」

「ケンが武士だから、子供の頃からそういう教育受けてんのよ。」

「いえ、俺は武士ではありません。家は代々神官をやっています。」

「シンカンって何？」

真司が尋ねる。

「バカねえ、神主さんのことよ。ねっ、ケン。」

早紀のあっけらかんとした口調で、重い話題が蝶のように軽くなる。

健司は少し笑った。

「笑った。小難しい顔してちゃだめよ。笑わなきゃ。ねっ、ケン。」
「うわあー！」

今笑ってみせた健司が、突然大声を上げてソファーの上に立ち上がった。クッションに足をとられ前のめりに倒れ込んだ健司は、テーブルで向こう脛を思い切り打ち、しばらく声が出せないでいた。

「いきなり、どしたの。」

「もし、俺ともうひとりの俺が、時代を超えて魂が入れ替わっているとしたら・・・。」

「入れ替わってるとしたら？」

「このままでは、死ぬのはもうひとりの俺。あなたの御子息の方だ。」

早紀と真司は顔を見合わせた。

「おふくろ、そういうこと。」

「だったら、この子が家の子になればいいじゃん。ケンはケンなんだし。」

早紀はそう言うのとそそくさとDVDを入れ替えた。

「マジかい。おふくろ。兄貴が聞いたら泣くぜ。」

「いいから、いいから。お腹すいたでしょ。カップラーメンでも食べる？」

「いや、そういう問題じゃないと思いますが・・・。」

こんな会話が交わされて居るなんて、もうひとりの健司には知るよしもない。

【2】もうひとりの健司（後書き）

楽しんで書かせて頂いて居ます。申し訳ありません。

【3】独りではないということ（前書き）

オールキャスト？です。健司は中山道を歩き始めました。歳の近い
沖田や藤堂と一緒にです。

【3】独りではないということ

歩きながら考える。

何故、どうして。

前兆？

いくら考えても、何も思い当たらない。

ごく普通の生活。

ありきたりの日常。

大した事なんてありはしない。

俺は、ただ歩く。

単調な作業が、俺の肉体を疲労させてゆく。

けれど、思考は深淵までには及ばない。

せせらぐ浅瀬に身を任せる魚影のように、ただゆらゆらとあるだけだ。

うつむいて乾いた地面ばかり見て歩いている。

いきなり鼻先に、こんがりと焼き色のついた団子を 突き出された。焦げた醤油の香りが鼻をくすぐる。

そういえば、朝に味噌汁をかけた飯を掻き込んだだけだっけ。

「食えよ。もたねえぜ。」

沖田総司だった。

香りに胃がキュッと縮まる。

思わず団子を頬張る。

「ああ、んめえ！

息もつかず貪る。

頬がゆるむ。

総司は団子を食べ終え、醤油の付いた指を舐めていた。

「これも食つか？」

後ろから走ってきた藤堂平助が、懐から饅頭を差し出した。

「俺には？」

総司がいたずらっぽく笑って言う。

「総司は、さっき私の団子食ったでしょ。饅頭はやらない。」
平介は俺に無理やり饅頭を握らせた。

「気にせず食え。」

「あ、ありがとう。」

餡が甘しょっぱい。

塩饅頭だ。

沁みるなあ。

緊張していた体の筋肉が、やんわりほどけて行くようだ。

上尾の宿を通り過ぎる時に、買い込んだのだろう。途中でエネルギーを補給しながらでないと、へばってしまう。

俺には考えがそこまで届かない。

頭の中がナゼの言葉で埋め尽くされているからだ。

「何か、心配事でも抱えている顔だぜ。」

「そんなところっす。」

口やかましいおふくろ。

長い単身赴任生活で存在感の薄い親父。

俺に輪をかけてアホな弟。

今ごろみんなどうしているだろうか。

俺はうなだれて溜め息をついた。

総司と平助が顔を見合わせた。

総司が俺の肩を叩く。

「総司って呼んでくれ。」

「俺も平助でいいぞ。」

「俺、健司。よろしく。」

「しょぼくれた顔して歩いてないで、なあ、先は長いしさ。仲良くやろうぜ。」

そう言って、総司は俺の隣りを歩き始めた。

「ナツナツ、芹沢先生で、恐いか？」

「さあ、そうでもないかな。」

健司は首をかしげた。センセイとは出会って二日目だ。全然解らない。

そうだ。

尻を蹴飛ばされた事を思いだした。

「やっぱ、恐いかも。」

「なんだ、はつきりしねえな。」

総司に背中を小突かれた。

胸につかえていた塩饅頭の餡が、ストーンと胃に落ちた。

甘さが広がる。

たちまち胸焼けした。

小豆餡は苦手だったのを今、思い出した。

平助は甘党に違いない。

俺の後ろを歩きながら、ふたつめの饅頭を頬張り、口をもそも動かしている。

「やっぱし懷に持ってやがった。」

「へへっ、残念でした。食っちゃった。」

ふたりのやりとりを聞いてみると、俺が友達としゃべっているのとあまり変わらない。

尊王だ攘夷だと、政治の事を議論ばかりしているのかと思っていた。俺は正直ホッとした。

「芹沢先生の事が気になるのか。」

「あつたりまえだろ。俺たちの頭だぜ。面倒は起こさない方がいいに決まってるさ。」

俺から情報を仕入れて、センセイとの間合いを計ろうという魂胆だ。

「巧く泳いでいかねえとさ。」

「その通り。」

「平助、おまえが言う？不器用なくせして。真面目だけで、世の中渡っちゃ行けねえよ。藤堂大先生。」

総司がおもいきり平助をからかう。

「またそれを言う。私だって好き好んで、こんな質に生まれついた

んじゃないんだから。もう。」

平助が、悔しがる。

総司が笑いながら小走りに先へ行く。

「総司は、いつもあんな感じなのか？」

控え目に呼び捨てにしてみる。

とがめられない。

よっしゃあ！

気持ちでガッツポーズだ。

「そうだね。あんな感じだね。稽古以外で真面目なのは、見た事ないなあ。」

「剣術は強いのか？」

「強いよ。でも私の方が強い。総司のは、そうだな・・・強いというより怖い。」

「恐いつて？」

「気迫だな。凄いよ。」

「おい、また自分の方が強いなんて言ってんじゃないだろうな。承知しねえぞ。平助の馬鹿野郎。ぶっ殺す。」

総司が拾った枯れ枝を振り回して、平助を追い回している。元氣だ。

あのテンションには付いて行けねえ。

それに思ったよりガキだし。

「くそガキだな。」

後ろで声がした。

イケメン土方さんだ。

「野口君だったな。あいつらとつるんできると、道中疲れて大変だぜ。ほどほどにしときなよ。」

切れ長の目が、涼しげに笑った。

格好よすぎて思わずみとれる。

この人は、自分が格好いいのを充分知っている。

立ち居振る舞いに無意識の意識が働いている。
無意識なんだから厭味がない。

男だなあ。と、関心する。

芹沢先生は、少し先を悠然と歩いて行く。

デカイから人より頭半分抜き出ている。

体格もいい。

良くも悪くも目立つ。

皆が怖がるのも無理はない。

センセイは、おそらく知っててそれを利用している。

京へ付いて行くと言った俺の顔を　じっと見つめ、

「ならば、一緒に行こう。」

そう言ってくれたセンセイの笑顔が、俺にはうれしかった。

皆が噂するほど、むやみやたらに怖い人じゃない。

俺はそう思う。

センセイは、時おり振り返って俺の様子を　窺っている。

視線が暖かい。

その視線に、俺は守られている。

だから、なんとか皆に付いて行ける。

「物見遊山だな。あいつら。」

三番隊の三人の頭の一人、新見錦が言う。

言葉がチクチクと痛い。

新見野郎は同じ水戸藩の人間らしい。

センセイの片腕だと平間のオッサンが言っていた。

俺はどうも苦手だ。

「先生から、くれぐれも頼むと言われているんだ。あいつらと一緒に
なって、羽目を外すんじゃないぞ。いいな。」

お前のお守りなんかしてられるか、迷惑だと言わんばかりに俺をに
らみ付ける。

互いに反目しあうほどの因縁はないはずだ。こいつは何をそんなに
イラついているんだか。

つたく。誰かに当たり散らしたいのは、こっちの方だつて。

「やられたな、健司。新見君は、先生が自分と同じ三番隊の組頭に甘んじているのが、気に入らないのだ。ずっと機嫌が悪い。」

キャプテン平山が俺に話かける。

眼帯を見るたびフック船長を思い出す。

だから、キャプテン平山と呼ぼう。

俺が気に入らないわけじゃないんだ。そういうことならナットクしてやる。

「先生がいいんだから、それでいいではないか。あいつはなんでも自分の尺で計りたがつていけない。己に厳しく人にも厳しい。息が詰まる。な、健司。」

どうもキャプテン平山も、新見野郎の事が苦手らしい。

「健司よ。新見は堅物なだけだ。あまり嫌うな。悪い男ではないよ。」

「

センセイは、湯にほてって赤くなった体を拭いながら言った。

湯に浸かりながら、そう言われてもと俺は思う。

下駄履いて風呂へ入るなんて初めてだ。

足元の板が、浮いて来るようで、なんか落ち着かない。

それでも、疲れは湯に滲んで溶けてゆく。

昨日はざっと計算して三十キロ近くを歩いた。

三十キロだぜ。

今日は少し楽だ。

陽の高いうちに大宮の宿に着いた。

昨日と三里は違つとオッサンが言っていた。

そのぶん、明日は四十キロ歩くらしい。

一里がだいたい三キロだつて。

筆算で計算した。

マジかよ。

力が抜ける。

この湯に溶けて無くなってしまいたい。

でも、待てよ。

四十キロといえばフルマラソンだ。

走ってなんぼの距離だ。

楽勝じゃん。

俺は、疲労というものが、身体に沈殿していくものだということにまだ気付いていない。

それに、俺がマラソン選手でないことも。

ああ、髪を洗いてえなあ。

江戸時代は、やっぱり不便だ。

俺は脳天気になんかことを考えていた。

「下帯洗っておけよ。」

センセイは、俺がこの時代のことを何も知らないことに勘づいている。

細かいところに適切な助言をくれる。

平間のオッサンも、先生に言い含められているらしい。

なにかと面倒をみってくれる。

不便だと、不平を感じるのは、俺が便利さにどっぷり浸って生きてきたからにはかならない。

何とか歩いている。

ひとりで歩いているんじゃない。

守られて歩いている。

情けないけど、何一つ自分ひとりではできないのだから。

雄鶏の鳴く声が聞こえて目が覚める。

夜明けがまだ青い。

修学旅行、見知らぬ土地で、興奮の朝を迎える。

そんなデジャヴに、俺は違和感を感じる。

まだ明けやらぬ往来を馬の蹄と鈴の音が軽やかに過ぎて往く。

今朝も抜け出せなかった。

この時代から。

慌ただしく朝飯を掻き込んで、出立の準備をする。

新しい足袋に新しい草鞋。

古い時代のうねりの中で、俺の新しい一日が始まる。
晴れた空。

俺は深呼吸をして、歩き出した。

【3】独りではないということ（後書き）

読みやすいようにと、試行錯誤です。ご意見ありましたらよろしく
お願いします。

【4】健司の居場所（前書き）

前項で大宮の宿と書きましたが、歴史的には鴻巣の宿の間違いです。
お詫びいたします。

【4】健司の居場所

トウキョウの街は眠らない。

幹線道路から大きくカーブして住宅街へ滑り込んでくる車のヘッドライトが、健司の部屋の西側の窓をするりと撫でて遠ざかってゆく。またしばらくすると、スピードを落とし、アスファルトをジリジリと鳴らして、数十メートル先の月極めの駐車場に停泊しようと車が音をたてる。

夜中というより、未明に近い。青い闇の海原だ。

窓の外は、防犯灯の明かりでむやみに照らし出されていく。

星の光はかすんで、地上にはまばらにしか届いて来ない。

先のことはどうでも、取りあえず今これからをこの世界で暮らして行かなければならない。

この時代に同化していかなければならないのだ。

健司は、もうひとりの健司ををつつがなく演じていかなければならない。

健司はカラーボックスの棚に無造作に置かれた上半身のプリクラを見ながら、この時代の健司を真似してみる。

中途半端な長さの、中途半端な癖毛を細いカチューシャで掻き揚げ。わりといい。邪魔な前髪がすっきりした。

しかし、まぬけた面だ。プリクラをまじまじと見ながら、俺は間違ってもこんな顔はしないと健司は思う。

親指と人差し指を いっぱいに開き、それを顎の下へもってくる。

プリクラと同じポーズだ。

「マジ・・・んっ？ カッケエ・・・？」

プリクラにプリントされた文字が、ようやく読める。

「何やってんの？」

さっきまで、ベッドで口を半開きにして寝ていた真司が、いつの間にか後ろに立っていた。

枕を抱え、欠伸を噛み殺している。

今日一日、真司は健司のお守りをしていたのだ。

今日は、この時代での健司のポジションと文明の利器である電化製品の使い方をレクチャーした。明日は外出編だ。

人にものを教えるのに、こんなにエネルギーが必要だとは知らなかった。教師には絶対ならない。いやなれはしないだろうが・・・。

それにしても、学校が休みで良かったと思う。

そうでなければ、こんな兄貴をひとりで放って置かなければならなところだった。

学校が春休みなのにも気付かない母親に、健司を任せてはおけない。いい加減というか、大雑把というか、良く言えばおおらかなのだが、兄の健司は、良くも悪くも母親の持つDNAを充分に受け継いでいた。

兄貴の事だ。もうひとつの時代で、ちゃんぽらんとうまくやっているに決まっている。

心配などしていない。薄情と言われてもいい。断言できる。

そうは言っても真司は、健司の話のどこまでが真実で、どこからが虚構なのか測りかねている。健司が嘘を言っているとは思えないが、それがほんとうのところだ。

兄貴が江戸時代へ行ってしまうているなんて確かめようが無い。

しかし、ここにいる健司がいつもの健司と違うのは、明白だった。

この人は、何もかも真っ直ぐで痛いくらいだ。俺の回りにこんな奴はいない。いたらうざったいだけだろう。事情が違う。だから、許容できる。

「明けるよ。夜が。」

カーテンの色が薄く透けてくる。

「俺、部屋行って寝るわ。兄貴も、もう寝な。電気毛布のスイッチ小にしときなよ。喉乾くし。」

「ありがとう。真司君。心遣い、かたじけなく思います。」

背中がむず痒い。真司は、健司の部屋を出た。

「かたじけないだってよ。」

それに、ありがとうなんて。誰かに言ってもらった記憶は、遙か遠い彼方にある。親兄弟なら、ありがとうなんて言葉、なおさら恥ずかしくて言えない。そんな言葉を簡単に言うのは、母親の早紀くらいだ。

真司は、自分のベッドに潜り込んだ。ひやりと冷たい。

「うへっ」

布団を肩に抱き寄せ、体を縮めた。

健司も、ベッドに潜り込んだ。真司の体温がそのまま残っている。暖かい。

健司にも兄弟はある。しかし、養子の先も定まらないまま、家族の温もりとは、無縁だった。

嫡男に生まれないということは、最初から厳しい枷を背負って生まれてくるということだった。

やがて眠りは溶けるように訪れる。夜も溶けるように明けてゆく。

新しい一日がまた始まるうとしていた。

健司が目覚めたのは、もう正午近くだった。

あまりに暖かい自分の居場所に、錯覚を覚えていた。この場所は自分に用意されていたもの。このまま浸かっている、誰も文句は言わないだろう。

「ダメだ。勘違いするな、健司！ここはお前の居場所じゃない。しっかりしろ！」

健司はようやく体を起こした。

携帯電話を使いこなしたい。その一心で説明書と格闘していた。おかげで頭が重い。

「休みだからって、いつまでも寝てると、なまっちゃうわよ。」

早紀は、健司をいつもどおりに扱う。ここに居る健司は、早紀のなかでは違う健司ではないのだ。

いつもと変わらない一日なのだ。そうであって欲しい。早紀の思いが、健司に伝わってくる。

「おふくろ・・様。申し訳ありません。」

早紀はふと健司を見る。

やはり違う健司がそこに居る。同じ健司なのに、匂いが違う。

「私の健司じゃない。」

でも、何が違うだろう。同じ、二十歳の若者なのだ。それもつい三日前までは、いつでも死を選択する潔さを求められる時代に生きていた子だ。きつと、ずいぶん疲れているに違いない。

「何謝ってんのよ。」

あんたが悪いわけじゃないんだから。シャワー浴びといで。すつきりするから。」

肩に重い物は、なにもかも洗い流してしまえばいい。今日、荷物がひとつ増えたなら、また明日、洗い流して楽になればいい。

この子は、肩に荷物を背負ったまま、ずいぶん長い道程を歩いて来た。そしてこの先もそうやって歩いてゆく。そんな目をしている。

覚悟が瞳の奥に沈んでいる。

今、この子に与えられるものがあるとしたら、しばらくぶりのやすらぎだろう。

早紀は、やはりこの目の前の健司の母親なのだ。それに代わりはいない。

「今夜はカレーでいいよね。」

「カレー？」

「いいね。茶色くて、辛くて、ドロドロしたやつ。美味しいよ。」

真司がからかう。

「ドロドロですか。」

「ドロドロね。」

また新しいことに遭遇しなければならぬ。カップラーメンといい、昨夜のパスタに宅配ピザといい、食べるのに勇気があるものばかりだ。

「美味かったけど・・。」

健司が鼻に皺を寄せ顔を曲げた。

健司の憂いのある表情に感傷的になっていた早紀は、一気に現実に取り戻された。

所詮、あっちの健司もこっちの健司も、親兄弟に心配をかけるどうしようもない息子に変わりはないのだ！

「さっさとシャワー浴びといて。」

頭のとっぺんから声が出た。

「まったく、もう。」

親の心子知らずなんてこのことだ。あっちもこっちも。

「健司のバカッ！」

【5】陰に潜む不安

一日一度、休み所へ入る。それ以外は野休みだ。街道の傍らに座って休む。

その野休みの間のことだ。総司がクソ真面目な顔を俺に近付けてきて、そつと囁いた。

「なあ……。うちの井上さんと、お前んとこの平間さんな……。」

そう言つてあたりを見回した。

「なんだ……。」

俺はぎゅつと唇を結んで耳をそばだてた。

「どっちが、ハゲてる。」

なんだ、それ。

「はあ？」

俺は素頓狂な声を上げた。

「ハゲ？」

「バカ！声が大きい。」

「おい、来たぞ、来たぞ。総司。おもしろがつて、からかつてんじやねえぞ。」

イケメン土方が総司の悪企みなんか百も承知だという顔をして笑った。

首根っこを掴まれたのは俺だった。

「誰がハゲてるだと。」

井上の源さんだ。

「総司。こいつに余計なことをふきこむんじゃねえ。黙ってりや分んねえんだよ。」

俺は固まつてた。月代を剃ってるから、そんなことどうでもいいと思うんだが、そうでもないらしい。ハゲが進むと貧相な鬚しか結えなくなるんだとか。

この時代でもハゲるという事は男にとって、ゆゆしき問題なんだ。

源さんが怒るのも無理はない。

「俺、なんも言ってないっす。」

「分かってらあ。」

力任せに突き放された。総司がすまんと小声で謝ったが、腹を抱えて笑っている。その笑い声が、頭の中を駆け巡り、俺はメマイがした。

気が付いたら、センセイの大きな背中におぶわれていた。暖かい。子供の頃、遊園地ではしゃぎ過ぎ遊び疲れた俺を親父がおぶってくれたっけか。整髪料と煙草の混ざった匂いが、俺を安心させてくれた。

中学の頃からだ。俺が親父の事をふがいないと思い始めたのは。優し過ぎるってことは、プラスではなくマイナスに作用するんだ。家族を思うなら、人を落とし入れてでもやらなきゃなんない時だってあるだろうが。

親父の仕事の事はよくわからないが、左遷のうきめめに合っても、仕方ないなと笑っている親父に腹を立て、投げ付けた言葉だった。親父の代わりにお袋の手の平が俺の右頬で鳴った。

あれから言葉も交さず、こんな事になってしまった。謝つとけば良かったな。もしかしたら、もう会えないかもしれない。多分、きっと…。

センセイの背中は日向の匂いがする。俺は涙ぐんだ。センセイがふと足を止める。

「鼻水をなすりつけるんじゃないぞ。」

「センセイ。俺もう大丈夫っす。」

俺はセンセイの背中から降りた。どうしてメマイなんか。疲れが溜っているんだろうか。旅はまだ始まったばかりだというのに、そんなんでどうする。俺は自分の頬を叩いた。

「駕籠をと思ったんだが、乗り慣れないと帰って悪いからな。」

平間のおっさんに預けていた荷物を背負いながら、センセイが言う。「疲れだけではなさそうだ。気分が悪くなったら早めに言え。」

「先生は、医術も学んでおられる。だから安心していい。」
おっさんが言う。

ソウナンド、センセイって頭いいんだと思いながら、目がおっさんの額を見つめている。ハゲているところは、毛穴がないから光ってるんだと沖田が教えてくれた。額はかなり後退しているとみた。

「ハゲてはおらんぞ。」

おっさんに後頭部をピシヤリとはたかれた。

「またメマイしたらどうするんすか。今度は平間さんがおぶって下さいよ。」

「甘えるんじゃない！」

ふたりのやりとりを聞いてセンセイが笑った。皆も笑う。二月の澄んだ青い空に笑い声が高く舞い上がり吸い込まれていく。

― 悪くない。

俺はこんな時間がずっと続くものだと思っていた。

その夜のことだ。センセイが切れた。宿割りのトラブルらしい。かなりもめている。寒いし腹が減ってるのに宿へは入れない。センセイの怒鳴り声が聞こえる。

「まずいなあ。」

おっさんが険しい顔をした。

「怒りだすと手がつけれなくなる。」

「十分怒ってるぜ。」

キャプテンが口を挟む。

「宿割り役は何やってんだ。」

おっさんが焦っている。

「おーい、平間！」

センセイが呼んでいる。

「キタツ……。」

おっさんとキャプテンが顔を見合わせた。

「平間、呼んでいるのが分らんかッ！我らは今夜は野宿だ。暖を取るゆえ火を焚け！」

そうとうな剣幕だ。声が腹に響く。恐ッ！

「逆らうなよ。建司。」

逆らうけない。

「逆らったら、鉄扇が飛んでくるぞ。」

「鉄拳？」

「いんや、鉄扇。」

なんだそれ。ま、いつか。キャンプだぜ。ファイヤー！なんか興奮してきた。燃えろよ燃えろってか。燃え？

「燃え〜！」

雄叫びを上げて、はつと見渡すと、総司や平助なんかも面白がってファイヤーを囲んでいる。

「なんだ、それ！」

平助が俺の口癖を真似る。

「なんか俺も叫びたくなってきた。」

総司がやるうぜと目配せする。三人でせえので叫んだ。

―燃え〜！

薄く靄がかかっているような、俺のぐずついた心模様が、一瞬の晴れ間を見た。

そこへ、役人が走って来た。

「おいでなすった。」

センセイが片頬で笑う。手に持った扇子の要で肩を叩いている。あれが鉄扇か。骨が全部鉄でできている。ずしりとした重みが、俺にさえ分かる。

役人が甲高い声でわめいているのをセンセイがふてふてしい顔つきで聞いている。やあら立ち上がったと思ったら、鉄扇が空を切り、役人の頭めがけて飛んだ。早業とはこのことだ。鈍い音が立ち、役人がその場で失神した。皆がぱかんと口を開けて、それを見ていた。痛い！だらうなあ。

センセイは文句あつかと言わんばかりだ。盛り上がっていた雰囲気が一気に覚めた。

春の宵の冷たい空気が、俺の首筋に絡んでくる。

少し冷静になれ。見たか。これがお前の置かれている時代だ。

振り回されたのが、刀だったらどうだ。役人は今頃、屍となって転がっているはずだ。

― 気をつける。

お前には戻らねばならない場所がある。忘れるな。

俺は身震いした。誰の腰にも、そうだ、俺の腰にも二本の刀がぶらさがっている。その気になればいつでも人を殺せる。タイミングが悪ければたちまち殺される側になる。

俺は振り返った。事件は収拾がつきはじめている。

誰も知らない。俺だけが知っている。結末。忘れていた。顛末を踏襲しているのは俺だけだ。

笑い会っている、総司と平助。おっさんとキャプテンは火を消しにかかっている。

俺の体から血の気が引いてゆく。吐き気がする。またメマイがしそうだ。

薪の焦げた匂いが広がり、周りの雑然とした音と景色がゆっくり旋回を始める。

センセイがちらりと俺の方を見た。

意識がか細くなってゆく。その時、ふいに肩を掴まれ、かろうじて取り戻した自分自身は、頼りなげに揺れる煙のようだ。

「お前は、いったい何者なんだ。」

耳に聞こえるのは、新見の声だ。

「俺は騙されんぞ。」

掴まれた肩に握力がかかる。敵意と疑念に満ちた新見の声が続く。

「事と次第によっては、街道の傍らの土くれにしてもいいんだぜ。」

「俺を殺るのか。」

「いつでも。」

「なあ錦。それくらいにしておいてやれ。」

いつの間にかセンセイがふたりの後ろに立っていた。

「あまり脅かすとかわいそうだ。刀の扱いも知らん人間に何が出来る。」

「しかし、芹沢さん。間者かも知れませんか。諸生派の。」

「そんなはずは無い。建司が野口さんの甥っ子なのはお前もよく知っているだろう。それにこんな間抜けた間者が居るものか。」

新見が舌打ちした。

「化けの皮は俺が必ず剥がしてやる。」

突き放された背中をセンセイが軽く叩く。

「お前が何者かは京へ着いたらゆっくり説明してもらおうとしよう。」

横川の関を抜け、風雨に晒されながら和田峠を越える。木曽路では、冷たい雪が草鞋に凍みた。

歩く。ただ歩く。無口な戦士の行軍が、隊列を成して京へ近付く。

ドラマのシーンが、瞼の裏を霞めてゆく。

そうだ。新徳寺。清河八郎の建白書。京都残留。このシナリオを知っているのは俺だけだ。偶然と必然が俺を選び、何を託した。俺のポジションはなんだ。本当に答えはあるのか。

【6】問題山積！

どんな文化だって、そのギャップには慣れるのに時間がかかる。そして心や体がそれを受け入れるには、もっとたっぷりした時間が必要だ。

でも、そんな流暢なことは言ってもらえない。時間はゆっくり、ただど容赦無く流れてゆく。

何故、こんな事が起こってしまったのか、解き明かす鍵を探さなければ…。

健司は焦っていた。

この偶然が必然であるなら。この必然は、何に由来するものなのだろうか。

健司は図書館で借りてきた歴史の専門書を毎日読みあさり、パソコンで関連サイトにアクセスしては、頭を抱えている。

必然だの偶然だのぶつぶついいながら、パソコンのキーを叩いている健司の後ろ姿をみると、真司は胸がギュツとなる。

—やりきれねえな。

と、思う。

それにしても、短い間にパソコンをある程度マスターした彼は頭脳

明晰だ。いや、努力の人だ。

少しでも歴史の中に名を残すだけのことはある。それだって充分偶然ではないのだ。

それに比べオバカな兄貴は、今頃その頭の悪さが露呈して窮地に追い込まれているんじゃないかと思うと、真司はあのダメ兄貴が愛しい。

「ねえ、そんなに一生懸命にならなくていいじゃん。元に戻ったらあんた死んじゃうんだぜ。それでもいいの。」

「そうだな。考えなくもない。多分、戻れないと思う。また同じ事が起きる可能性の方がずっと低いから。」

もしこれが、偶然の所産だとしたら。

「じゃ、そんなことしなくてもいいじゃない。あんたがこっちの建司をうまく始めたように、兄貴もあっちでうまくやっているとと思うよ。」

建司がマウスを動かす手を止めた。

「たとえそうだとしても……。」

「何？ 俺も家族もあんたを充分受け入れて、やっていけると思うよ。」

「みんなきつと、永遠に思うんだよ。自分の息子は、切腹して死んだんだのかもしれない。助けてやれなかったって。いつまでも思う

んだよ。そんなの耐えられない。」

底のない湖に投げられた石は、微かな波形を残しながら、永遠に落ちてゆく。そう、波立たない湖面の奥底を永遠に、波形を描いて…。

「同じことじゃん。あんたがあっちへ戻っても、俺は思うよ。助けてやれなかったって。あんたのことを。」

建司は今、確実にこの時代に息づいているのだから。

「違うだろ！」

健司が、いきなり真司に掴みかかった。

「な、何すんだよ。」

「俺は、お前の兄貴がどんな奴か、何一つ知らない。お前の兄貴がどうなるうと、俺の知ったこっちゃない。だけど、お前、自分の兄貴が死ぬんだぞ。死ぬったのがどういことだか分かるか。昨日まで一緒に笑い合っていた奴が、次の日にはただの肉の塊になっただぞ！おい！」

助けられないかも知れない。でもやらなければならない。自己満足で終わるうとも、何もしないよりはましだ。

真司は、健司のものすごい剣幕にびっくりしていた。そんなことを言われても、人の死に直面した経験のない真司には、実感が湧かない。家族も友人も健在で、田舎のジジババだって殺しても死にそうにない。

「クツ、苦しい…。」

襟元を掴まれて、真司は息が出来ないでいた。

「すまない。」

真司を突き放すと、そのまま健司はジャンパーを驚掴みにして、家を飛び出た。

「バツカじゃね。説教かよ。」

真司は、自分の気持ちの落ち着く場所を探した。

健司はこっちの健司が決めていた、コンビニのバイトを始めていた。

出来ないなんて言っただけじゃない。そうなんだ。誰もが最初から、全てに精通しているわけじゃない。わからないことがあったっていい。常識の無い連中なんか、掃いて捨てる程居るんだ。

あの不安定な時代を少なからず二十年は生きてきた。

健司はそんなにヤワじゃない。

ドアを押して客が入って来る。

「いらっしやいます。コンバンワ。」

店員が一斉に声を上げる。

「ケンちゃん。笑顔、笑顔。」

一緒にレジのシフトに入っている同じバイトの笑美が、真司との諍いを引きずっていた健司の横腹を肘で小突く。

「ありがとうございます。またお越し下さいませ。」

建司はこれでもかと笑ってみせた。

「うっ。かわいい…。」

女の子が目の前に立っている。

レイヤーの長い髪。化粧つ気がないのに、くちびるは桜色で、睫毛は揺れるように長い。

彼女は、華やかな水引きのついた祝儀袋に、ストッキング。ラメの入ったマニキュアを買った。

「んっ、結婚式でもあるの？ かな。」

彼女のドレスアップした姿を想像しながら、ジャンコードを通す。

「ありがとうございます。」

の声が掠れた。

「ケンちゃん。ヨダレ。」

言われて思わず口を拭ってしまった。

「うつそビョーン。わっかりやすい奴。」

笑美は舌足らずで喋る。色白な彼女は彼女なりにかわいい。

「まったくもう。焦っちゃうじゃないですか。」

ほてりが首筋から頭の先へ一気に上ってくる。顔が赤くなってるんじゃないかと、ますます焦る。

「彼女、たまに来るよ。来たら教えたい。」

「いいですよ。いちいちそんなことしなくて。」

健司は口を尖らせる。笑美は笑って煙草の補充を始めた。

コンビニから家までは歩いて二十分ほどの距離だ。

笑美とは、ほんの二時間一緒になるだけだが、今のところ身近な女の子は、彼女だけだ。

この時代の女の子は、みんなかわいく見える。ふわふわした髪をなびかせて、鮮やかな色彩を身にまとい、まるで花畑のようだ。

こんな時に女の子のことを考えて心とませるなんて、不謹慎だと思う。

でも、つまるところはそれだ。

こっちの健司には、彼女がいらないらしい。付き合っている痕跡すら見あたらない。

―つまらない奴だな。

健司は、親愛をこめて笑った。

そういう健司にも彼女はいない。いつ死ぬかわからないのに、決まった彼女なんて作れない。心を残さないためだ。

悲しい思いはしたくないし、させたくない。

健司くらいの若い男は、遊里で仮初の恋愛に身をゆだねるしかない。遊女の身の上も哀しければ、健司ら若い志士の身の上も、またせつない。

バイトの帰り道、健司は煙草をくわえる。ライターで火を付けると、煙草の先がぼちりと赤く染まる。

自分勝手に思いを寄せていたあの人は、どうしているだろうか。

胸の奥が締め付けられるように痛い。

こんなことになるのだったら、たとえ受け入れられなくても、告白しておけば良かったと思う。

やっぱり、好きだったんだな。あの人のこと。

健司は公園の車止めに腰を掛け、煙草の煙を吐き出した。

見上げる夜空は、防犯灯やネオンで妙に明るい。それらのいい加減

なほの白さに掻き消され、相変わらず星も見えない。

「おい！クソ健司。」

声をかけられた。

―クソ健司だと。

こう見えても、健司は血気さかんな、尊皇の志士だ。一発食らわしてやろうかと、拳を握り締める。

「怒ってんだぞ。連絡しても、返っちゃこねえし。具合でも悪いのかと思ったら、すっかりバイトかよ。」

―えっ、健司の友達か？

健司は拳を緩めると、慌てて携帯を開いた。メールに着信。コヒナタばかり。こいつか。

「コヒナタ？」

「バイト終わるの待ってたんだよ。ゆっくり説明してもらおうかなと。」

コヒナタが肩から手を回し、健司の首をやりわり締める。

肩幅の広い、ひよろりと背の高い男だ。眼鏡のガラスに夜の街の風景が映り、表情がうまく見えない。

「心配させやがって。また失恋か。」

健司の失恋は、日常茶飯時なのか。

―参ったな。

何をどう説明しよう。健司の眠い頭の中が、グルグル回っている。

明るい夜空は、ますます白さを増し、もうすぐ夜明けだ。

コヒナタはどうリアクションするんだろう。健司は頭痛がしてきた。

今、京へ着きます（前書き）

しばらく更新停止していました。またよろしくお願いします！

今、京へ着きます

女が紛れてるなんて噂が、まことしやかに流れた。

んな訳ない。宿の据え風呂なんか、順番に入るから、女がいたら分かるって……。

「なあ……。そうだろ」

「誰が言い出したんだか……」

総司が、俺の問い掛けに白けて言った。

「六番隊の中沢ナントカの妹が、隊列の後をつけてるって、もっぱらの噂だよ」

さすが、藤堂先生！情報が早いっ。

「でも、でかい女だぜ。面あ、十人並みかな。歳の頃は、二十七、八。結構な年増だぜ」

「名前は、お琴」

藤堂先生、なんだか嬉しそうだ。

「なんだ二人とも。いつの間にそんなこと確かめたんだよ」

「あつたりめえだ」

なんと彼等の素早いチェック！

「でも俺は、女はいい」

そう言つて総司は唇を尖らせた。

一方的に女に惚れられて追い回され、死ぬの生きるのと大変な目にあつたらしい。

総司の口からはつきり聞いたわけじゃないが、藤堂先生から、そんな話を聞いた。

今ならさしずめストーキングされたつてところなんだろうか。

ヒーローにも、わけありなスキャンダルのひとつくらいはあつたんだ。俺は総司の横顔に、親しみを覚えた。

総司、俺は年増でも、チョイ興味あるかも……。

でも、恋愛なんて人生の中で、それほど大切じゃない。

なんて、どうした俺。こんな時代だって、彼女くらいは、欲しいだろうが！俺の人生から恋愛を取ったら何が残るんだっ！

「あーっ！バイトオ！」

俺は、大変なことを思い出してしまった。

色白のカワイイ笑美ちゃん…。笑美ちゃんと一緒にコンビニのバイトをする予定だった。

告るイメトレだって、できてたんだ。アホくさがる弟を笑美ちゃんに仕立てたシュミレーションは無駄だったのか。

俺は肩を落としてションボリした。足元に力が入らない。

「なんだ、健司。国許にでも女を置いて来たか」

「そんなんじゃない」

俺は総司を睨み付けた。

総司はのほほんと、京へ着いたら女抱きに行こうぜとのたまう。

いいのか。君は幕末の悲劇のヒーローなんだぞ。孤高の天才剣士なんだぞ。

「東男に京女ってね」

「色町にいるのは、京女とは限りませんよ。あちこちから流れてきてるから。京女がいいんなら、素人と契るしかないでしょう」

「だから、素人はいいって。懲り懲りだぜ」

「玄人だって素人だって、女が恐い生きもんだってのは変わらないでしょ」

藤堂先生は、煎餅をポリポリ齧りながら、また良く喋る。

「健司く。こんな奴ほつといて、俺と遊びに行こうぜ。金ならあるんだし」

バカ言え。俺、まだ童貞だって！風俗で無くすなんてありえねえ。カツと赤くなったら、それがばれてしまった。

「ふうん、そういうことかあ。こいつあ、楽しみだぜ」

総司がにんまりした。

ソーローで、できなかったただけだ。その女には、速攻フラれた。望みは、笑美ちゃんだったのに。

それより、センセイに京の都へ着いたら、事の次第を説明せよと、課題を出されている。

水戸から参加している者は皆、俺が俺についてどう言い訳するか、わくわくしているらしい。

特に新見錦。よほど俺が気に入らないらしい。あいつは堅苦しくていかんと言いながらも、水戸の連中は皆あいつを気遣っているのが空気で分かる。

オッサンが、

「一生懸命な奴だからな。まあ、棘があるくらい勘弁してやれ。打ち解けるのに暇はかかるが、悪い奴じゃないんだ」

と、膨れっ面の俺を諭す。そうは言っても、ああ突っ掛かられたんじゃない、

「なんで」と凹んでしまっじゃないか。錦め。

中山道は草津から東海道とひとつになる。ここまで来れば、京は近い。

よく歩いたぜ、俺。御褒美をやりたくらいだ。

「新徳寺、建白書、京都残留」

俺はつぶやく。

「なんのお題目だ。さっきからブツブツと」

総司が聞く。

頭をよぎるドラマのキーワードを口ずさんでいるだけだ。詳しい事を述べよと言われても、意味はうる覚えで、よく分からない。

「新徳寺。京へ着いたら、先ずそこへ入る。だが建白書とはなんだ。俺達が朝廷に、何を建白するんだ」

錦が俺のつぶやきを耳聴く捕らえ、難癖を付けにきた。建白と言えば朝廷と決っているらしい。

「いや、確か清河八郎が……」

言いかけて、錦に着物の袖を掴まれた。

「それ以上は言うな。って、なんでお前がそこまで知ってるんだ」

かえって俺の方がビックリした。錦のリアクションが、普通じゃない。

「誰にも言つな」

って、何を……。

「建白なんて、血迷つても言うんじゃないぞ。それに京都残留ってどう考えても辻褄が合わない。俺達はそもそも京で……」

と言いかけて、錦がはつとしたように口を噤んだ。

俺にか、野口健司にか知らないが、秘密があるようだ。そんなそぶりに気付かないほど、俺はオバカじゃない。

今まで語られてきた、ドラマや小説のストーリーとは違う何かを俺は感じた。

「清河は、江戸帰還命令に従う」

「江戸へ帰還？ 清河先生が？ まさか……」

いちいち声がひっくりかえる。真面目に驚く錦のリアクションが面白くて、俺は知ったかぶりをしてみた。

「それに従わないのが、俺達水戸派と試衛館の連中」

「ナンデ！」

ドラマの‘意義有り！’なんてシーンを思い描いて、いい気分になってたのに。

そんな俺の頭ん中。クライマックスシーンを破って錦が叫んだ。錦の顔が心なしに赤い。

「なんで……、あいつらが……俺達と行動を共にするんだ」

よっぽど意表を突かれたらしい。錦が咳き込みながら喋る。

なんとか冷静になろうとして、なりきれない錦の目が、空中を泳いで、どっかへ行ってしまいそうだ。

「とにかく、まだ分からない先の事だろう」

「信じなくても、別に構わないよ。どうせ俺の言う事なんか」

いじけてやる。

「いや、先生がこの先お前は特別な存在になるとおっしゃるから。だが、俺は謝らんど。しばらくは休戦だ」

泳いで行った錦の視線が、イケメン土方の肩先に、モンシロ蝶のように震えて留まった。

男が惚れる男ってやつだ。堅物の錦でも例外じゃないらしい。

イケメン土方が肩先を右手で払う。わっ、嫌味だ。

「仲間内で何をコソコソ喋ってたんだよ」

「いや、たいした事じゃない」

俺がごまかそうとすると、総司がクールに笑った。

「いいな、仲間が居て」

「総司にだって、いるじゃないか」

「さあ、どうだか」

切っても切れない絆で結ばれてんじゃないのか。近藤、土方、沖田なんてのは。

そうだ、歴史ヲタの小日向が誇らしげに言ってたな。あれは小説の中で美化されて行ったエピソードだと。

小日向。あいつが居てくれたら、怖いもん無しなんだけどな。

やがて、蹴上から京の町へ入る。

誰一人も落伍することなく、三条大橋にたどり着いた。

俺には試練が待っている。もう、知ったかぶりじゃすまない。未来を知る人間だということを告白しなければならぬ。それも生半可な知識しかないんだ。

「分かってんだろっな」

総司が俺の横腹をつつく。

俺の喪失の危機だ。童貞どころか、命だって危ないんだ。

文久三年二月二十三日。

壬生村、新徳寺。二百四十名が、ひとまずここへ入る。

そして、それぞれが、近隣の郷土邸や農家に振り分けられ、旅装を解くことになった。

「俺達の宿、八木邸の当主は玄之丞。奥さんはマサ、男の子がふたり。新見さんの宿は南部邸」

超能力者よろしく、俺は眉間に皺を寄せ、思い出しながら言った。違つてたらどうしよう。一か八かだ。

そしてその通りになった。俺はホツとし、水戸の連中は顔を見合わせた。

「次は建白書だな」

センセイが低い声で俺に囁いた。

「そうです。今夜、新徳寺に皆が集められるでしょう」

「それは最初から決っていた事だ。誰からそれを仕入れた。お前は誰なんだ」

「信じられないでしょう。きっと」

「それは今決める事じゃない」

俺は、自分をどう伝えていいか、迷っていた。

未来から来た？ やっぱ魂が入れ替わったとしか言い様がない。

「錦から聞いたんだが、清河が早々に江戸へ帰還を決めるとは、ほんとうか」

「それは、清河が朝廷に願ひ出ます」

「あの野郎、なんで江戸へ戻る。約束が違うだろう」

センセイがデカイ体を硬くして、拳を握り締めた。

「それで、俺達が京へ残留するという訳か」「幕府からお目付け役として数名、俺達水戸派、そして試衛館道場の人間が残ります」

「近藤さん達がか？」

「ええ、けど……」

言いかけて、俺は総司の顔を思い浮かべた。仲間が居ていいと言った彼の瞳が、どこにも焦点を結んでいなかったのが、ひどく気になった。

「彼らには、気を付けて下さい」

それしか言えなかった。

この先起る悲しい出来事を ありのまま告げるなんて出来ない。

どうにか回避できないのか。無い頭で考えても無駄かな。

夕景が迫っていた。俺は八木邸の前に立ってそれを見上げた。

「何が起きるのかな、この先。分かってるんだろ、お前には……」

隣りの南部邸から、錦が現れた。

「暮れるな。京の町が」

「そうですね。錦さんは、水戸に残して来た物ってありますか」

「無いね。俺は全部捨てて来た。お前はどうか」

「俺はたくさんの未練を残してきました」

「未練はいけないな。心が残る」

「最初から死ぬのが目的じゃないでしょ。生き残ってなんぼでしょ」

「面白い事を言っな、お前は。覚えておくよ。生き残ってなんぼだったって」

俺は初めてじっくりと錦の顔を見た。

小作りの顔いっぱいに見開いた目が、印象的だ。

憎たらしいばかりだった錦が、優しく笑ってくれて、俺は嬉しかった。

「これから、建白書騒動だな。主立った連中が新徳寺に呼ばれている。俺も今から行って来る。これは最初から仕組まれた事だ。俺達は驚きはしない。他の連中がどう出るかだ。まあ、お前はゆっくり休め」

そう言つて、俺の肩を叩いて向かいの新徳寺へ消えて行つた。

【8】おバカな兄貴が歴史を変える？

健司、真司、そして小日向。

東京の片隅のありふれた住宅街。

部屋の窓から児童公園が見える。ビビットカラーにペイントされた滑り台が、朝露に濡れて光っていた。

セラミックのヒーターが小さな音を立て、狭い六畳間を暖めている。

二杯目のコーヒーを啜りながら小日向がつぶやいた。

「やはり、ほんとうだったんだ」

そしてずれかけていた眼鏡の中央を指で支えた。

俺が大学で健司と仲良くなったのは、偶然じゃないんだ。

小日向が何かとてつもないことを話そうとしている。

健司と真司は瞬きをやめた。

「俺はただの歴史オタじゃない。この知識は、ひいじいさんから受け継がれたものなんだ。小さい頃から叩きこまれた。歴史の本流を。英才教育ってやつだ。特に俺んちは、そういう家系なんだ」

「また、ヒナタッチは冗談きついよ。どという家系よ、それ」

「歴史の番人とも言えいいのかな」

——歴史の番人！！

健司と真司の声がユニゾンで部屋に響いた。

- -

真司が突然笑い出した。笑いが声にならない。ヒイヒイいながら、「それってドラマかなんかの見過ぎじゃね」とのけぞった。

小日向は顔色も変えず話を続けた。

「前世って知ってるよな」

「輪廻転生か」

健司が身を乗り出した。

「今度はスピリチュアルかよ」

真司はやる気なさそうにベッドに寝転がった。

「世の中には生まれ変わりということが、やはりあるんだ」

そして、同じDNAを持って生まれてくる特異な例がある。それがふたりの健司だというのだ。ふたりの魂は四次元空間の歪みが作用すると、容易に入れ代わってしまうらしい。

「それは仮説で、事例など無いに等しかった。ただ、健司に大学の学食で出会った時、俺は何かを感じてしまったんだ。同性同名とい

うだけではない何かを」

半信半疑だった。そして健司と付き合ってるうちに、彼のちゃらんぼらん加減に、やはりありえないという結論に到達しようとしたところだったらしい。

「驚いたよ」

「だが、小日向君。君が歴史の番人というなら、この現実をどうとらえるんだ」

健司は冷静だ。もし入れ替わりがほんとうなら、大変なことになるのではないか。

「歴史がかわるってか？あの兄貴が歴史をかえるキーマンだってえ？マジすか」

「真司君。茶化してみても駄目だよ。彼は多少であっても、歴史をかえる。幕末のことは、ドラマになったりしているから、多少の知識があれば、自分の立場がわかるはずだ。俺は切腹するらしい。彼がそれを知っていたら、回避しようと動きまわるに違いない。そして歴史を変える」

「そこなんだ」

小日向の顔色が曇った。

「歴史の番人だなんて偉そうな肩書きだけど、いってみれば机上の役目だ。歴史の資料に異変がないか、歴史上の建造物や文化財に異

変はないか見張っているくらいが関の山だ」

「そんなことあるわけないじゃん」

「俺もついさっきまではそう思っていたよ。でも、いよいよ始まったんだ」

「いよいよ？」

健司が聞き返す。

「次元空間の歪みが生じたということは、ほかにも魂の入れ代わった人間がいるという可能性だってある」

「把握はしているのか」

「いまのところは健司、お前だけだ」

「で、何か変わったことはありませんか？」

「まだ、何も」

あつてからでは遅いのだと小日向は言う。

「もし、異変が起こったとしても、俺達には何もできない」

ドラマなんかじゃ、歴史の流れを守る時空警察みたいなのがあったりして、うまくおさめるのだからうけれど、タイムスリップみたいな現象すら科学的かつ具体的に示すことのできない人類は、ましてや

魂の入れ代わりなどの謎を解くなんてではしない。

「だけどき、見つけたんだ」

小日向は携帯を取り出し、ブックマークをクリックした。

ハンドルネームはユイカ。出身地は京都。

新京極で不思議なオヤジに出会った。

という題名の記事。

真偽のほどは確かめてみないと、小日向はそのブログの記事をクリックした。

「平間さん……」

健司が絶句した。

記事の頭に画像。うらなり瓢箪みたいな顔をしているが、眼光の鋭い男が、コワモテでVサインしている。

「こんなところでVサインですか……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304b/>

俺達、幕末新選組！

2010年10月9日15時34分発行